ZOCALO 2020 10▸11

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

企画展：上田 薫

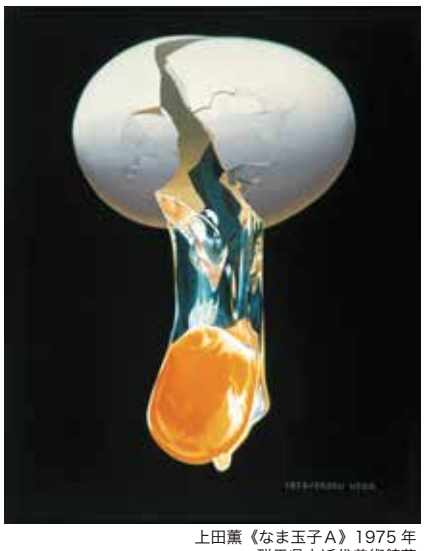
2020年11月14日（土・県民の日）～2021年1月11日（月・祝）

清涼感のある鮮やかなピンク色のジェリーに、それを掬おうとするピカピカでカチッとした銀色のスプーン。スプーンには、作家の部屋の様子が歪んで映り込んでいます。

写真と見紛うようなリアルさを持つ《ジェリーにスプーンC》（1990）は、当館の収蔵作品のなかでも人気の絵画のひとつです。ときたま開催される「MOMASのとびら」の予約不要プログラム「キラキラカチカチ★スプーンワールド」で、作品をご覧になったことがある方もいらっしゃるのではないでしょうか。作品画像を見たあとに、ピカピカなスプーンたちを磁石の力で繋ぎながら自由に組み立てていくこの活動では、熱中する子供たちによって大作ができていく様子を頻繁に見ることができます。もしかしたら、子供達のこの創作意欲の原動力は、キラキラピカピカしたものになぜか惹かれてしまう人間の本能的な感覚にあるのかもしれません。

上田薫《ジェリーにスプーンC》1990年 埼玉県立近代美術館蔵

この作品の作者で、県民の日に開幕する企画展の主役でもある上田薫（1928～）もまた、キラキラピカピカしたものに惹かれ、約半世紀にわたり作品制作を続けてきた画家です。東京藝術大学で油彩を学び、主に抽象画を制作していた上田は、1956年に映画のポスターの国際コンクールで国際大賞を受賞したことを契機に、グラフィックデザインの世界に足を踏み入れます。それからしばらく彼は絵画制作から離れますが、1970年に、対象そのものだけをそのまま写実的に描く表現―上田本人曰く、制作に行き詰まったときに頭を空っぽにするための「クソリアリズム」―で貝殻を描きます。それが転機となり、以後、デザインの世界で吸収した写真の技術を利用して、モノをリアルに描き込む作品を次々と生み出してきました。



上田薫《なま玉子A》1975年 群馬県立近代美術館蔵

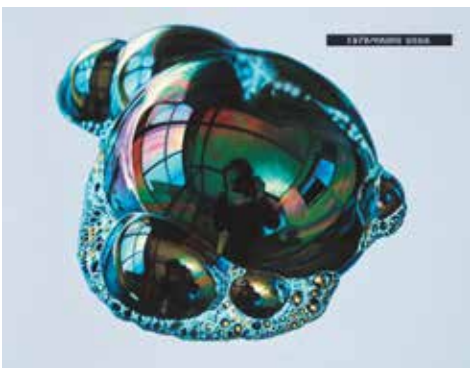
その後、アイスクリームがまさに溶ける瞬間を描いたことをきっかけに、上田は「一瞬の動き」を絵画の中に閉じ込めるようになっていきます。当館所蔵の《ジェリーにスプーンC》も、ジェリーが崩れ、スプーンから流れ落ちる瞬間をとらえたもので、静止画であるにもかかわらず「時間」を画面上にとどめた作品であると言えます。

ほんの一瞬の時間を封じ込めるのに、キラキラツヤツヤしたものはピッタリの画題だったのでしょう。生玉子だったり、シャボン玉だったり、ビンの底だったり、流れる川だったり。これらのモノたちは、光をその表面上で反射させることで、私たちの目に光の輝きや照りを認識させます。見る角度や、モノの表面の動きによって光の反射のあり方も変わるので、私たちの目が捉える輝きも常に変化していきます。結果、そのことが「キラキラツヤツヤ」という感覚に繋がるのです。つまり、キラキラツヤツヤの正体は一瞬一瞬の光の反射で、上田の絵画は、その移ろっていく一瞬の光を切り取り、画面上にとらえたものであると言えます。本来であれば瞬く間に変化していく光が絵画のなかにカチッと永遠に固定されることで、私たちは新たな視覚的発見を得ることでき、まさにそういった点が上田作品の人気の秘訣なのではないでしょうか。

御年91歳を迎えた現在も、上田は新境地に向けて精力的に制作活動を続けています。例えば、近年「元気」をテーマに描かれた青くツヤツヤとしたアカンサスたちは、生命力が漲る瞬間を固定されたが故に、強烈な精彩さと存在感を放っています。

さて、ここまで筆を尽くしてきましたが、キラキラしたものが魅力的だということは、言葉での説明以上に、「キラキラカチカチ★スプーンワールド」に熱中する子供たちの姿勢から感じとることができます。百聞は一見に如かず。ぜひ、上田薫によるキラキラカチカチ★な世界を、会場で心ゆくまでお楽しみください。

(K.H.)



上田薫《あわD》1979年

アーティスト・プロジェクト#2.05 スクリプカリウ落合安奈 Blessing beyond the borders―越境する祝福―

2020年10月24日（土）～2021年2月7日（日）

「アーティスト・プロジェクト#2.0」は、これまでのMOMASコレクションや企画展の枠を超え、現在活躍しているアーティストを紹介する展示プログラムです。

今年度は、美術家のスクリプカリウ落合安奈を迎え、「アーティスト・プロジェクト#2.05」を開催します。

作家本人に今回のテーマや取り組みなどを伺いました。

今回のアーティスト・プロジェクトでは、どのようなテーマを掲げていますか？

“2つの祖国に根を下ろす”試みから生まれた「土地と人の結びつき」というテーマを発展させて、人々の中に眠る帰属意識の概念について考えています。今回の展示の１つ「骨を、うめる」では、ベトナム中央部の歴史ある港町・ホイアンを舞台に、近郊にある江戸時代の日本の商人・谷弥次郎兵衛氏を中心に3名のお墓を取材しました。合計1か月少々のリサーチの中で谷氏のお墓を訪ねたとき、喧騒に満ちた旧市街を出て墓所にいたる道を歩むと、お墓の周りが虫・魚・鳥などのホイアンのたくさんの生命に包まれていることにまず心を打たれました。実はお墓は北東10°―ホイアンから見た日本の方角―を向いて建てられています。お墓を背に、さらに北東10°の方向に歩みを進め、最後に視界に現れたのが海でした。ここに吹く風が、日本とホイアンを結んだことを実感しました。

リサーチの成果を、世界遺産に登録されているホイアン旧市街で、インスタレーションとして発表をしたときは、北東を向いた窓の上で本物の風に揺れるカーテンに、あの時眼前に広がった海の映像を投影しました。帰国後、墓をどこに向けて立てるのかということや、海を越える人の移動を可能にした船のことに思いを巡らせているうちに、更に強く方角というものを意識しました。そして、太陽や月の軌道から方角を示す渾天儀に着想を得たオブジェもインスタレーションに取り入れました。コンパスのように直接的でないことによる意味の広がりが重要だと考えています。言い伝えによると谷氏は、日本の鎖国政策によりベトナムのフィアンセとの仲を引き裂かれたものの、もう一度フィアンセに会うためにホイアンへ戻り、その地で没したといいます。このことから、国策や、時に人々を隔てる国という境界を越えていく個人の想いについて考えさせられています。この谷氏のエピソードに象徴される、“鎖国と国際結婚”から見えてくる隔たりを生むものと、逆にそれを越えてゆくものが、現時点で到達したテーマです。墓が人生の終わりを示す反面、結婚や誕生は生の側面を照らし出し、作品にコントラストを生み出していると思います。

《北東10°》カーテン，ベトナムの古い椅子，映像，サウンド，風，サイズ可変，2019年

また、帰国後も調査を継続する中で、彼に関して様々な描かれ方があることに気づきました。ぞれぞれの違いが意味することも含め、現在展覧会に向けてリサーチを進めています。

今回の展覧会へ向けた、新たな取り組みやリサーチの様子などを教えてください。

墓石によると谷氏は長崎の平戸出身で、平戸の港からベトナムへ旅立っていったと考えられます。彼が命を閉じた土地だけでなく、命が始まった土地も見てみたい、そういう思いで長崎でのリサーチに基づく新作を予定しています。ただ、あらかじめ結論を予測して形を考えてもその通りにいかないことがほとんどなので、実際に長崎を訪ねてみて、そこで何が見つかるか…関係機関や研究者の協力を得て、現在リサーチを進めている段階です。

平戸には、谷氏の他にも鎖国に翻弄された国際結婚をした人物にまつわる記録があるという情報を得たので、現地での発見を丁寧に持ち帰りたいと思います。また、ホイアンで存在を知ったもう１人の御朱印船貿易商の荒木宗太郎氏と、その妻となり長崎で永眠したベトナムの王女にも注目しています。当時の輿入れの様子は、現在も長崎の祭り「長崎くんち」の中で再現され、語り継がれています。

今回生まれ育った埼玉で展示することとなり、これまで作品を作る上ではあまり意識することのなかった「県」という単位の自分自身の足元を考える機会になりました。これまで、日本とルーマニアという大きい単位での自身のコミュニティーに対しては、土着の祭りや風習のフィールドワークを通して土地の哲学を紐解いてきました。しかし、今回埼玉県という単位に絞って改めて深く考えたことで、更に今まで取り組んできたことの解像度が上がった感覚があります。これまでの各地でのリサーチを通じて、自分のコミュニティーの文化の客観視が異文化理解の第一歩ではないかと感じていたので、自分自身もコミュニティーの単位によってはその意識が弱かったという発見と、実際やってみてどう意識が変わっていくのかという変化について考察しています。

60年前、私の母方の祖父母が結婚を機に、公団が売り出した土地の抽選に当たって埼玉県内に引っ越してきたのが、埼玉に根を下ろすきっかけでした。自分の来し方を照らし合わせると、人の移動や結婚という生の節目、ルーツ、ローカルな儀礼といった作品のテーマにもつながります。

今年は新型肺炎（COVID-19）の影響であちこちのお祭りが中止になったりしていますが、神事だけ行われているケースもあり、改めて土地にとっての祭りや風習とはどのような意味を持つのかを再考しています。今はなかなか厳しい状況ですが、可能な範囲で埼玉の祭事を取材しています。今回出品する《Blessing beyond the borders》では、日本とルーマニアの土着の祭りや風習が映し出す景色を二重螺旋の構造を用いて視覚的に重ね合わせ、また聴覚的にはその土地でレコーディングした音を編んできた中に、埼玉県でレコーディングした土地の音を組み込んで、空間に響かせる予定です。

(聞き手：G.R.)

《Blessing beyond the borders》各地で信仰や神事を捉えた写真群，サウンド，ライト，サイズ可変，2019年

このほか、キャリアを重ねる上で刺激を受けたできごとや、昨今の社会状況が作品に与えた影響など、インタビューの続きを当館HPでご覧いただけます。

スクリプカリウ落合安奈

美術家。1992年埼玉県生まれ。東京藝術大学油画専攻を首席、美術学部総代で卒業。同大学院グローバルアートプラクティス専攻修了。現在は同大学院彫刻専攻博士課程に在籍しながら国内外で作品を発表。日本とルーマニアの２つの母国に根を下ろす方法の模索をきっかけに、「土地と人の結びつき」というテーマを持つ。国内外各地で土着の祭や民間信仰などの文化人類学的なフィールドワークを重ね、近年はその延長線として霊長類学の分野にも取り組みながら、インスタレーション、写真、映像、絵画などマルチメディアな作品を制作。「時間や距離、土地や民族を越えて物事が触れ合い、地続きになる瞬間」を紡ぐ。

主な近年の展覧会

2020年　個展「Imagine opposite shore―対岸を想う」銀座蔦屋書店・GINZA SIX／東京
2019年　個展「骨を、うめる／one's final home」nap gallery／東京
2019年　個展「mirrors」Bambinart Gallery／東京
2019年　「Bridge」ホイアン（世界遺産）／ベトナム
2019年　都美セレクショングループ展「星座を想像するように―過去、現在、未来」東京都美術館／東京
2018年　「Ascending Art Annual Vol.2 まつり、まつる」SPIRAL／東京・京都巡回

はみだしソカロ　はみだしソカロの投稿募集中です。ご意見などお寄せください。